

# ヤンゴン日本人学校における民族楽器の指導とその実践

前在ミャンマー日本国大使館附属ヤンゴン日本人学校 教諭  
茨城県牛久市立下根中学校 教諭 松野 哲生

キーワード：在外教育施設、ヤンゴン、音楽教育、民族楽器、国際理解

## 1. はじめに

在外教育施設に派遣が決定したとき、音楽教師として、その国の伝統的な楽器を子ども達に演奏させたいと強く思っていた。学習指導要領においても、「諸外国に伝わる楽器などの演奏に、児童が意欲をもって主体的に取り組むような器楽の活動を行うこと」とあり、在外教育施設での教育活動の中心に据えようと思った。

しかし、日本でもそうだが、絶対数が足りない楽器（日本では和楽器等）を子どもたちに触れさせようとすると、「触って、音を出して終わり」になりがちで、楽器に対する理解が深まらないという反省があった。もっと目的意識をもって楽器に触れさせられないかと考えていた。そこで、課題解決型の課題で楽器に触れさせることにより、ただ触って音を出すだけでなく、奏法や音色についてより深く理解できるのではないかと考えた。

## 2. 本校の実態と実践方法

ヤンゴン日本人学校は2年前まで派遣教員・現地採用教員の中に音楽教員がいなかったため、日本の音楽教育への興味・関心は非常に高かった。また、本校にはミャンマーの伝統楽器「ハーブ」「パタラ」「ミャンマー太鼓」があり、それを1年で1種類ずつ、3年かけて指導しようと考えた。



授業の様子

## 3. 指導の実際

### (1) 1年次 ミャンマーハーブの実践

#### ① ねらい

ミャンマーハーブの奏法を理解し、その音色を味わわせる。

#### ② 指導の展開

ミャンマーハーブは全16弦が「ソ」「ミ」「レ」「ド」「ラ」「ソ」「ミ」…と調弦されている。そこで、その開放弦だけで演奏できる曲を練習した後、「ファ」の入った曲を弾いてみようという課題を提示し、どうやって「ファ」の音を出すかを考えさせた。

#### ③ 指導の流れ

学習活動・内容	時間	○指導上の留意点	手立て
1 既習曲を演奏する。 2 本時の課題を確認する。 ミャンマーハーブで「きらきら星」演奏しよう	5	○前時までに学習した「チューリップ」を交代で演奏し、基本的な奏法が確認できるようにする。 ○「ソ」「ミ」「レ」「ド」「ラ」「ソ」「ミ」…の調弦では演奏できないことに気付かせるようにする。 ○グループごとに自由にハーブに触れさせ、「ファ」の音が探せるようにする。 ○「ファ」の音が出せたグループに発表させ、他のグループの参考になるようにする。 ○奏法を見せずに教師が模範演奏することで、一人の間隔をおかず演奏できることに気付かせる。	
3 「ファ」の音をどのように出すかを考える。 ・調律用のペグを回す。 ・2人で演奏する。 4 「ファ」の音の出し方を知り、「きらきら星」を演奏する。 5 「シ」の音を出し、「メリーさんのひつじ」を演奏する。 6 本時のまとめをする	20	○左手を使い、弦を張ることで音を変えることをきちんと理解させ、演奏できるようにする。 ○グループで教え合いながら「きらきら星」を引けるようにする。 ○開放弦では演奏できない「シ」の音についても同様であることを理解させ、演奏させるようにする。 ○左手を使うことで、全ての音が出せること確認し、2学期の合奏でハーブを使っていこうとする意欲を高められるようにする。	○今までの知識や経験、ハーブの構造などから「ファ」の音の出し方を考え、演奏できるようにする。

④ 成果と課題

子どもたちは、「ファ」の音を出そうと楽器のいろいろなところを触ったり、弦のはじき方を工夫したりしていた。ただ楽器に触るだけでなく、ミャンマーハープの構造や弦のはじき方による音色の違いを自分たちで感じ取ることができた。

途中、模範演奏（演奏する姿は見せない）をすると、さらに活動は活発になり、「調弦ペグを瞬時に調節する」「2台用意する」などいろいろな意見が出された。

課題としては、やはり楽器の絶対数が不足6～7人に1台となってしまったため、一人が楽器に触れられる時間が限られてしまったこと、さらに、ミャンマーハープが弾けるGT（Guest-Teacher）を呼ぶことができず、本来の音色をきちんと感じられなかったことがあげられる。



ハープを操作する児童

(2) 2年次 ワーパタラの実践

① ねらい

ワーパタラの楽譜を理解し、その奏法で演奏することができる。

② 指導の展開

右図のパタラの楽譜を見て、どのように演奏するかを考える。途中、音だけの模範演奏を聴き、それを参考にさらにどのように演奏していくかを考えさせる。

ပုံရွှေရည်

ပုံရွှေရည်	ပိုင်မာလာနင်းစိ	ကြွယ်ကာလာသင်းကြည်	မြိုင်မာလာသင်းထုံစိ
1 1 1 3 1 1	3 1 1	3 1 1	3 1 1 1 1
1 3 5 5 6 3	1 2 6		5 7 3 4 5

  

ဆင်ရန်ကမ္ဘာပေးသည့်	ခင်းသန့်သန့်ကွေးကွေးပြုံး	ဆင်မြိုင်မြိုင်ပန်းတော်ပုံရွှေရည်
1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1
6 5 4 3 2 5	5 4 3 2 1 3	4 3 2 1 7 6 7 1

③ 指導の流れ

学習活動・内容	時間	○指導上の留意点
1 音階を確認する。 2 本時の課題を確認する。	5	○「きらきら星」を交代で演奏することにより、音階を確認できるようにする。 ○日本で慣れ親しんでいる五線の楽譜ではなく、数字だけで書かれていることに気付けさせるようにする。
ワーパタラの楽譜を解説し、パタラを演奏しよう！	15	○数字通りに演奏していくことに気づかせる。
3 どのように演奏するかを考える。 ・数字通りに演奏する。 ・「1」が続いている。 ・2本で演奏する。	10	○グループごとに自由にパタラと木琴に触れさせ、演奏の方法を探らせる。 ○演奏方法を考えられたグループに発表させ、他のグループの参考になるようにする。 ○奏法を見せずに曲だけを聴かせ、聴いた情報から演奏の仕方を考えさせる。
4 模範演奏を聴き、どのように演奏するかを考える。 ・1本で演奏している。 ・「1」の音はあまり聞こえない。		○一回の打鍵にいくつの音が聞こえるかをアドバイスする。 ○パタラの音を確かめながら何の楽譜上のどんな音が聞こえてくるかをアドバイスする。
5 模範演奏の映像を見て奏法を知る。 ・実際に演奏してみる		○上の段は回数、下の段が音階を表していることを確認する。 ○木琴も使い、練習させる。
6 本時のまとめをする		○楽譜を読み解くことで、ミャンマー音楽の楽譜で演奏できることを実感させ、積極的に演奏しようとする意欲を高める。



奏法を考える児童



実際に演奏して確かめる

#### ④ 成果と課題

パタラの盤面に、数字が貼ってあるので、上下に演奏していったり、横に演奏していったり、2本のばちを使って演奏したりと、いろいろな演奏の仕方が出され、目的意識をもって楽器に触れることができた。また、音声のみの模範演奏を聴くと、さらに活動が活発になり、「わかりました」というグループが演奏し、相互の理解が深まった。

課題としては、楽器の絶対数が足らず、一人が楽器に触れられる時間が限られてしまったこと。子どもたちが演奏してみたいと思う曲を演奏させられなかったことがあげられる。

### (3) 3年次 ミャンマー打楽器の実践

#### ① ねらい

ミャンマー打楽器の奏法を知り、奏法の違いによる音色の違いを感じ取ることができる。

#### ② 指導の展開

ミャンマーの伝統楽器を並べ、音声のみの打楽器演奏を聴かせ、何の楽器でどのように演奏されているかを考えさせる。その中で、演奏する人数や楽器の配置、演奏の仕方を考える中で、奏法を理解し、音色の違いを感じとらせる。

#### ③ 指導の流れ

学習活動・内容	時間	○指導上の留意点
1 ミャンマーの楽器を確認する 2 本時の課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content;">何の楽器でどのように演奏しているかを解明しよう！</div>	5	○ミャンマーの伝統楽器を並べ、それぞれがどのような楽器かを簡単に確認する。 ○演奏を聴き、どの楽器がどのように使われているかを考えることを確認する。 ○「複数の楽器があること」、「金属音がすること」、「音の高低があること」の3つは気づかせるようにする。
3 ボンドーの合奏を試聴する 4 何の楽器で演奏されているかを考える。 ・複数の打楽器。 ・金属音がする。 ・音の高さが違う。	15	○グループごとに自由に楽器に触れさせ、演奏の方法を探らせる。 ○演奏方法を考えられたグループに発表させ、他のグループの参考になるようにする。 ○何度も聞かせ、ボンドーのたたき方を工夫させる。 ○「チェイ」については、どのように持って演奏するのかを考えさせる。
5 模範演奏の映像を見て奏法を知る。 ・実際に演奏してみる 6 本時のまとめをする	10	○ボンドーのどこをどのようにたたいているかを確認させる。 ○大きさの違うボンドーをならべ、旋律楽器として使用していることを知る。 ○実際に大きさ順に並べ、演奏してみる。 ○日本の和太鼓や締太鼓にも応用できないかを考える。たたき方を工夫することによって、日本の楽器の構造や特徴を知る。



用意した楽器



音を出しながら確かめる

#### ④ 成果と課題

聞こえてくる音を頼りに、楽器に触ったため、楽器を（特に打楽器）をかき鳴らすこともなく、音を確認しながら触ることができた。また、2グループに分けてそれぞれの考えを発表し合い、それを参考にして楽器に触れることにより、より興味を持ちながら音を出すことができた。楽器の配置や奏法についても、音色をもとに考えさせることにより、本物の演奏に近い配置や奏法を考えることができた。

課題としては、模範演奏の楽器と同じ楽器を用意したが、質が悪く、きちんとした奏法で演奏しても、まったく同じ音が出ず、「演奏されている楽器」に入りづらかったということ。また、模範演奏の動画では、演奏されているのに動画には映らず、児童にとってその真偽が確かめられなかった点があげられる。

#### 4. 実践のまとめ

今まで、楽器指導（とかく伝統楽器や民族楽器）はGTを呼び、楽器の説明をしてもらい、模範演奏を聞く。その後児童生徒が楽器に触れる。このパターンがほとんどだった。しかし、この方法で授業を行っていると、中1生で取り扱った「箏」を2年生で復習したとき、その知識がほとんど忘れられていたことがあるなど、どうしても上辺だけの知識・理解になってしまう。この方法はオーソドックスではあるが、GTを探すことの困難さもさることながら、児童生徒たちが楽器に触れるにあたり、あまりにも受け身の授業になってしまうというのが欠点だという思いが常にあった。

楽器はその存在自体で、児童生徒の興味関心を引くことができる。その楽器の存在自体にある児童生徒の興味・関心を実際の奏法や音色の特色の理解にいかにつなげるかという点を念頭に今回は、課題解決型の授業を組んでみた。

その結果、3つの実践とも、ただ楽器の音をかき鳴らすのではなく、目的意識を持って楽器に触れ、今までの授業法とは違う楽器へのアプローチをしていた。また、初めて見る楽器の奏法や仕組みを、課題を解決していく中で身につけていくため、知識を深めるためにも大変有効であったと考える。（パタラの授業を受けた生徒は、パタラの楽譜を1年後でもきちんと覚えていて、演奏することができた）さらに、1年に1つの楽器を指導することは、その楽器の指導を学年に固定し、系統立ててミャンマーの民族楽器を指導できるということにもつながった。

こういった実践のなかで、一番苦労したのが、「児童生徒たちにいかに課題意識をもってもらおうか」という課題をいかに設定するかであった。2年目のパタラでは、学校事務員が現地のパタラ奏者と知り合いで、楽譜を手に入れられたこと、3年目の打楽器では、学校にある打楽器で演奏している動画をネット見つけたことで課題への糸口が見つかった。人のつながり、情報網の発達は大変ありがたく、今回の実践につながったことを感謝したい。

日本に戻って、ミャンマーの民族楽器を指導する機会はないと思うが、課題解決型の指導法を楽器指導に生かしたことを日本の楽器指導にも行かしていきたいと思う。